

第14部会

かない。平穩な暮らしが続く場合には、不要な文書はその都度廃棄されてゆくのであり、また火災によるタイムカプセルも出現しない。焼かれていない粘土板文書は水分に弱く、現在まで残存する率は低い。現時点での文書の数という観点から整理をすると、これまでの一五〇年間に十数万点の文書が公刊されたが、約二倍の文書が博物館などで今後の公刊を待っている。今後発見される文書はさらに多い。しかしほぼ無限に多いのは、すでに失われた文書の数である。

二〇世紀半ばにはアッシリア学者たちによって文書の「実証的」な研究が目指されるようになり、本格的なアッカド語辞書の編纂が開始された。そのころA・L・オッペンハイム（一九六四年）が、「西洋人」にとってメソポタミア宗教は理解できないし、理解したいとも思えないと吐露したことは、西欧文明の「呪縛」のなかではメソポタミア宗教を論じられないことの宣言であつたとみることができ。しかし今日では西欧アッシリア学でも「呪縛からの解放」が進み、「宗教文書」の研究が盛んになってきた。

古代宗教研究では入手可能な資料の偏りのほかに、インフオーマントや実際の儀礼が欠けていることが痛手となる。しかし発表者は、さまざまな地域、特に日本の民俗宗教との比較研究によって、西欧アッシリア学の限界を超えるメソポタミア宗教の研究法を見出し得ると考える。たとえば欧米の辞書で「呪術（師）」「呪文」「邪術（師）」などとされてきたものの再検討には、原文の精査だけでなく、豊富な情報と資料をもつ様々な民俗宗教との比較が有益である。近年の研究によってメソポタミ

アの主要な宗教的職能者であるアーシップ（辞書では「悪魔払い師」）は、多様な職種の人々を擁する集団を形成して神殿に属し、さまざまな「唱えごと」（シプトウ、辞書では「呪文」と儀礼行為を組み合わせて浄化、除災、病氣治療、神像の制作と修復儀礼などを行っていたことがわかってきた。「マクルー」とよばれるアーシップの文書のなかでは、いわゆる「邪術」（キシュブ、イプシユなど）の被害を訴える人が、その犯人としての様々な種類の「邪術師」（カッシャーブ、エーピシユ、サーヒルなど）にそれぞれの「邪術」を返すことをアーシップに依頼している。このような宗教文書を日本語に訳すためには、日本における対応物とその背景を比較考察することが必要となる。またそれによってメソポタミア宗教の新たな理解も可能になってゆく。

戦間期ハワイ日系宗教と

二つのナシヨナリズム

高橋典史

近代以降、日本の領土拡張や海外移民の増加という流れのなかで、日本にルーツをもつ多くの宗教集団が、海外地域においてさまざまな活動を行ってきた。そのなかでも、「日本」というナシヨナルな領域を越境した集団にとっては、日本と移動先の二つの国家への対応が必要であつた。そうした集団もまた、近代日本における「宗教とナシヨナリズム」の一側面である

う。そこで、本報告では、ホームランド（＝日本）との関わりに着目して、海外の日系移民の在住地域であるハワイにおける日系宗教の、その国家をめぐる意識を明らかにした。

一九三〇年代以降の在米日系社会では、日中戦争への支援、民族主義的な言説の頻出、皇紀二六〇〇年の奉祝行事など、日本ナショナリズムが高揚した。ただし、当時の日系社会の国家へのコミットメントは、ホームランドである日本のみ限定されたものではなく、日米両国にまたがるものであった。そのため、本報告では、戦間期の日系宗教が関わった主要な出来事を、ホームランドである日本に対する意識だけでなく、アメリカ合衆国に対する姿勢の両面から探ったのである。

一九二六年一月二五日の大正天皇崩御をめぐる日系宗教界の動向では、主要な仏教宗派や神社では追悼の行事が数多く行われ、日系社会をあげて天皇の崩御を悼んだ。そして、一九二八年十一月の昭和天皇即位の大礼においても、奉祝会が盛大に挙行された。当時の新聞報道でも、皇室への崇敬が主張されており、文化ナショナリズムとしての日本ナショナリズムが日系社会において広く共有されていたことが分かる（ただし、あくまでそれは、市民としてのアメリカへの忠誠に反しない限りでの、日本へのコミットメントであるのだが）。

次に、一九三〇年代の日系仏教界における最大のイベントの一つであった第一回汎太平洋仏教青年大会（一九三〇年七月、ホノルル開催）をとりあげて、当時の仏教関係者の意識とそれに対する日系社会側のまなざしを、おもに新聞報道から検討した。大会を通じてナショナリズムの色彩は薄く、東西文明の融

和、民族の協調、仏教の世界進出といった主張が多くみられる。ただし、当時のハワイ（アメリカ）のローカルなコンテクストから解釈するならば、こうした主張は、白人支配者層の日本人および仏教に対する差別や抑圧への宗教を通じた抵抗であり、自己正当化であったともいえる。

そして、皇紀二六〇〇年（一九四〇年）をめぐる日系宗教の動向についても考察した。皇紀二六〇〇年の奉祝行事の多くを担った神社界であるが、前田孝和が指摘するように、同年は、ハワイの神社界が現実的なアメリカ化に迫られた時期でもあった。そして、神社だけでなく、仏教界でもアメリカ化を志向しつつも、各種の奉祝の催しが挙行された。こうした動きには、米国の市民ナショナリズムと、仏教と結びついた日本の文化ナショナリズムの並存を読みとることができる。そのなかで、当時の仏教界の関心事として、米国市民である日系二世の教化・教育があったことは注目し値する。米国市民権を有す日系二世こそが、悪化する日米関係、衝突する東西文明の仲介役となってくれるだろうという期待が寄せられたのである。

このように、一九二〇年代後半から一九四〇年代にかけてのハワイの日系社会における宗教と国家をめぐる動向には、ハワイ・アメリカ社会への適応の志向性と、日本への愛着の存続という二つの傾向を看取することができる。日米の二つの国家の境界に位置するハワイという地において、いずれの国家にも包摂されきれないかたちでの存続を模索した日系宗教の歴史は、「宗教と国家」をめぐる問題に何らかの示唆を与えてくれるだろう。